

1列王記9-11章 「貫徹されなかった従川頂」

1A 全うされた事業 9

1B 主の警告 1-9

2B 事後の事業 10-28

2A 第二にされる神の義 10

1B 異邦人への証し 1-13

2B 富と力の惑わし 14-29

2A 離れた心 11

1B 千人の女 1-13

2B 切り裂かれる王国 14-40

1C 南の反逆者 14-22

2C 北の反逆者 23-25

3C 内なる反逆者 26-40

3B 短い一生 41-43

本文

列王記第一9章を開いてください。私たちは今日で、ソロモンの生涯の全てを学び終えます。

1A 全うされた事業 9

1B 主の警告 1-9

9:1 ソロモンが、主の宮と王宮、およびソロモンが造りたいと望んでいたすべてのものを完成したとき、9:2 主は、かつてギブオンで彼に現われたときのように、ソロモンに再び現われた。

ソロモンが王となってから24年あるいは25年経ちました。彼が父ダビデから受け継いだ最も大きな事業、神殿建設の事業が全て終わりました。いや、父ダビデ以前から、モーセを通して与えられていた神の約束が連綿と受け継がれ、預言者たちの心に温められて、そしてようやく今、ソロモンを通して神の家が建てられました。私たちは前回、神殿奉獻式を読みました。数え切れないほどのいけにえを捧げ、また神殿に栄光の雲が満ちて暗くなり、ソロモンは祭壇の前で長い祈りを捧げました。イスラエルの民も全てが高揚し、この時をお祝いしたのです。

このような時に最も大切なのは、実は、たった独りになることです。多くの祝福があったけれども、自分独りになったときに、主が静かに自分に語ってくださることが、実は最も大切なことであるかもしれませぬ。

ギブオンで主が現れたというのは、彼が若い時に、主に「あなたが願うものを与えるが、何を願っ

ているか？」と主に尋ねられて、民をさばく時に必要な理解と判断を与えてくださいとソロモンは祈りました。ソロモンの治世の初めの時に主が聞いてくださった祈りは、その通りになりました。そして今、主は同じことをソロモンにしてくださいます。

9:3 主は彼に仰せられた。「あなたがわたしの前で願った祈りと願いをわたしは聞いた。わたしは、あなたがわたしの名をとこしえまでもここに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。

主がソロモンの祈りに応えてくださいました。ソロモンはこの宮に主をお入れするのではなく、主がご自分の名を置くと決められたこの町で、この宮の中であるいは、この宮に向かって祈ることを聞いてください、と祈りました。殊に、罪を犯した時に主に立ち返るなら、その罪を赦してください、と祈りました。それを主は聞いてくださいました。主は、「この宮を聖別した」と言われます。それが、単なる建物ではなく、主のみに属する建物、他の建物から別たれた建物とすると決めてくださいました。

9:4 あなたが、あなたの父ダビデが歩んだように、全き心と正しさをもって、わたしの前に歩み、わたしがあなたに命じたことをすべてそのまま実行し、わたしのおきてと定めとを守るなら、9:5 わたしが、あなたの父ダビデに、『あなたには、イスラエルの王座から人が断たれない。』と言って約束したとおり、あなたの王国の王座をイスラエルの上に永遠に確立しよう。

これは父ダビデがソロモンに教え、そして主がキブオンで教え、そして大事なものは、ソロモン自身が神殿奉献において民に教えた言葉です。モーセの律法にある、神の掟を守り行ないなさいというものです。従順になることによって、初めにダビデに神が与えられた約束、ダビデの王座が永久に確立することがソロモンにおいて実現し、またその代々の王に実現されるということです。けれども、主はかつてモーセに語られたように、不従順であるときどうなるのかについて警告を与えられます。

9:6 もし、あなたがたとあなたがたの子孫が、わたしにそむいて従わず、あなたがたに授けたわたしの命令とわたしのおきてとを守らず、行ってほかの神々に仕え、これを拝むなら、9:7 わたしが彼らに与えた地の面から、イスラエルを断ち、わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。こうして、イスラエルはすべての国々の民の間で、物笑いとなり、なぶりものとなる。9:8 この宮も廃墟となり、そのそばを通り過ぎる者はみな、驚いて、ささやき、『なぜ、主はこの地とこの宮とに、このような仕打ちをされたのだろう。』と言うであろう。9:9 すると人々は、『あの人たちは、エジプトの地から自分たちの先祖を連れ出した彼らの神、主を捨てて、ほかの神々にたより、これを拝み、これに仕えた。そのために、主はこのすべてのわざわいをこの人たちに下されたのだ。』と言うようになる。』

主がここで、いかにご自分の言葉をご自分の宮よりも大切にしておられるかが分かります。実は、ソロモンが神殿の構造を完成したときにも、主が彼に語りかけておられたのです。6章12節です、「あなたが建てているこの神殿については、もし、あなたがわたしのおきてに歩み、わたしの定めを行ない、わたしのすべての命令を守り、これによって歩むなら、わたしがあなたの父ダビデにあなたについて約束したことを成就しよう。」主なる神は注意深く、この神殿に力があるのではなく、主ご自身とその御言葉にあることを強調されました。

それにしても主が、神殿奉献というおめでたい祝祭の直後に、このような否定的なことをなぜ語られたのでしょうか？それはもちろん、主は人の内にある全てのものをご存知だからです(ヨハネ2:25)。私たちであれば、「ソロモンがこれだけ熱心に神殿を建て、たった今、情熱的に祈りを捧げたのだから、この神殿は安泰であろう。」と考えるでしょう。けれども、主は私たちの心、その霊を深みにまで探られます。そして事実、ソロモンの心の中に大きな変化が起こっていて、それに対して主が警告を行なっておられたのです。

私たちは、決して主の警告をないがしろにはしてはいけません。警告を受けている時に、「このようなことは起こらない。私たちは十分に心備えしているから。」と誤ってしまいます。けれども、警告を与えておられるということは、警告を受けなければいけない理由があるからです。使徒パウロは、「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。(1コリント 10:12)」と言いました。立っている、と思っているだけなのです。

ソロモンの心の中に何が起こっていたかと言いますと、「達成感」です。イスラエルの歴史において、神殿が建てられるということは一つの大きな新時代の始まりであり、イスラエルが神に建てられた国として栄えることを意味していました。それを自分の世代で実現したということがあったでしょう。ですから、すでに完成したのですから、それ以上することはないと思ってしまうわけです。いいえ、完成したのであれば、その完成を維持しなければいけません。それは、確かに主が彼らの間に住まれるために、モーセによって与えられた神の命令に従うという、最も大切な要素があるわけです。その要素とは、正義や公正、また憐れみ、こういったものです。

引用が長くなりますが、使徒ペテロがこの継続的な霊的成長を詳しく語っています。ペテロ第2章5節から11節です。「こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまづくことなど決してありません。このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御

国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。」

2B 事後の事業 10-28

しかしソロモンは、次第に、徐々に、この靈的営みを鈍化させていきます。そして妥協を少しずつ初めていきます。

9:11 ツロの王ヒラムが、ソロモンの要請に応じて、杉の木材、もみの木材、および、金をソロモンに用立てたので、ソロモン王はガリラヤの地方の二十の町をヒラムに与えた。9:12 しかし、ヒラムがツロからやって来て、ソロモンが彼に与えた町々を見たが、それは彼の気に入らなかった。9:13 それで彼は、「兄弟よ。あなたが私に下さったこの町々は、いったい何ですか。」と言った。そのため、これらの町々はカブルの地と呼ばれた。今日もそうである。9:14 ヒラムは王に金百二十タラントを贈っていた。

思い出してください、ツロの王ヒラムとの間にソロモンは契約を結んでいました。5章に書いてあります。ヒラムがソロモンに杉とその他の木を与え、また木を切り倒す職人を与えます。その代わりにソロモンは、それら労務者らに賃金を与え、またヒラムの一族にも食糧を与えます。これが契約の内容でした。そして、ここを読むと、ヒラムはソロモンに金を与えました。120 タラントで、1 タラント 34 キロなので、4080 キロになります。(相当な額ですね。今の金相場は価格上昇なのですが、1 グラム 5 千円ぐらいです。計算すれば 204 億円です！)ソロモンは見返りに、ガリラヤの二十の町をヒラムに与えました。けれども、ヒラムは気に入りませんでした。そして、「いったい何ですか」という意味のカブルと呼ばれました。ガリラヤは、きれいで土壌の豊かな土地ですが、簡単に言えば「田舎」です。新約時代もユダヤの人々からは見下げられていました。そこにメシヤが現れたのは興味深いです。

ソロモンの中に、計算が働いているのをここで私は感じます。よく言えば商売上手なのですが、友としてのヒラム、兄弟としてのヒラムに対しての真実が足りないのではないか、と思います。父ダビデとの違いを、ヒラムは少し感じたことでしょう。

9:15 ソロモン王は役務者を徴用して次のような事業をした。彼は主の宮と、自分の宮殿、ミロと、エルサレムの城壁、ハツォルとメギドとゲゼルを建設した。9:16 ・・エジプトの王パロは、かつて上って来て、ゲゼルを攻め取り、これを火で焼き、この町に住んでいたカナン人を殺し、ソロモンの妻である自分の娘に結婚の贈り物としてこれを与えていたので、9:17 ソロモンは、このゲゼルを再建した。・・また、下ベテ・ホロンと、9:18 バアラテ、およびこの地の荒野にあるタデモル、9:19 ソロモンの所有のすべての倉庫の町々、戦車のための町々、騎兵のための町々、ソロモンがエルサレムや、レバノンや、すべての領地に建てたいと切に願っていたものを建設した。

ソロモンは軍事的な要塞を次の事業として起こしました。主の宮と宮殿の次に、ミロとエルサレム

の城壁を立てています。ミロは、城壁ではないですが建物を守るための壁です。そして、軍事上戦略的な地点にあるところに、要塞の町を建てています。それがハツオル、メギド、そしてゲゼルです。ハツオルとメギドは、私たちはイスラエル旅行に行きましたね。ハツオルはイスラエルの北から来る勢力の防衛、メギドは大陸間の交易の要所で、そこでしばしば戦いが繰り広げられました。そして、ゲゼルは、今のテルアビブとエルサレムの間辺りにあります。そしてこのゲゼルは、実はパロが自分の娘をソロモンが娶った見返りに与えた町でした。

軍事的な要塞を建てること自体は、決して悪いことではありません。しかし、ソロモンが統治している国は、神の支配される国です。他の異邦人の国と違うのです。したがって、軍事的要塞を作っても、それに拠り頼まないという細心の注意が必要です。私たちの生活に当てはめれば、確かに定期預金を組んで良いかもしれないし、投資も間違ったことではないし、生命保険に入っているし、健康診断も受けてよいでしょう。家の戸締りも大切です。けれども、これらのものに拠り頼んではいけない、主が安全を与えてくださるという信仰を保っているかどうか、ということです。

9:20 イスラエル人でないエモリ人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の生き残りの民全員、
9:21 すなわち、イスラエル人が聖絶することのできなかつた人々の跡を継いで、この地に生き残った彼らの子孫を、ソロモンは奴隷の苦役に徴用した。今日もそうである。9:22 しかし、ソロモンはイスラエル人を奴隷にはしなかつた。彼らは戦士であり、彼の家来であり、隊長であり、補佐官であり、戦車隊と騎兵隊の長であつたからである。9:23 ソロモンの工事を監督する者の長は五百五十人であつて、工事に携わる民を指揮していた。

列王記の著者は、はっきりとイスラエルが聖絶することのできなかつたことを書いています。そして、かつてヨシュアが死んだ後のイスラエルも、同じように懲役に課して彼らを聖絶することがなかつたことを、士師記は書き記しています。

9:24 パロの娘が、ダビデの町から、彼女のために建てた家の上で来たとき、ソロモンはミロを建てた。9:25 ソロモンは、主のために建てた祭壇の上に、一年に三度、全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげ、また、主の前にある壇で香をたいた。彼は宮を完成した。

ソロモンは、パロの娘を自分の妻として最大の敬意を払っていました。ソロモンの宮殿は神殿に隣接していましたが、パロの娘の後宮も宮殿の隣にありました。私はソロモンの治世でこれが不気味です。エジプトの娘が、イスラエルの王と結びついているということ自体が、神の民が世と結びついている象徴ではないかと思われるからです。けれども、彼は主にいけにえを捧げています。ですから、ソロモンは、礼拝はきちんと行っていたのです。主を愛していたのです。けれども、妥協をしているのです。

9:26 また、ソロモン王は、エドムの地の葦の海の岸辺にあるエラテに近いエツヨン・ゲベルに船

団を設けた。9:27 この船団に、ヒラムは自分のしもべであり、海に詳しい水夫たちを、ソロモンのしもべたちといっしょに送り込んだ。9:28 彼らはオフィルへ行き、そこから、四百二十タラントの金を取って、これをソロモン王のもとに持って来た。

「葦の海」とは紅海のことです。エラテはイスラエルの南端にあるエイラットであり、エツヨン・ゲベルはおそらくヨルダンのアカバではないかと思われます。そこが世界貿易の拠点になりました。ヒラムは、ツロという地中海を自分の庭のようにして世界貿易を展開させていた都市国家だったので、ヒラムはこの南洋貿易でも一躍買ったのです。そして、420 タラント、つまり1万4280 キロをソロモンのところに持っていきました。

「オフィル」はアラビア半島の南東部にあるのではないかとされています。あるいは北アフリカ、またインドだという理論もありますが、いずれにしても紅海を渡る貿易であります。そこに膨大な貴金属を採掘する場所があったのでしょう。

2A 第二にされる神の義 10

1B 異邦人への証し 1-13

10:1 ときに、シェバの女王が、主の名に関連してソロモンの名声を伝え聞き、難問をもって彼をためそうとして、やって来た。

「シェバ」はアラビア半島のイエメン辺りにあった国です。金銀、香料、希少な材木で有名な地域です。歴史の史料には、王の他に女王も統治していた記録もあります。ヒラムの船団が行き来して、シェバの女王がソロモンの噂を聞きつけたのです。そして大事なものは、午前礼拝でも話しましたが、「主の名に関連して」というところです。ソロモンの名声には、必ず主の御名が付いていました。それは、ヒラムがダビデと友好関係にあった時からそうでした。ソロモンが、レバノンの杉を調達してほしいと願った時に、ヒラムは、「きょう、主はほむべきかな。(1列王 5:7)」と感嘆しています。つまり、ソロモンの名声はあくまでも主の証しだったのです。

かつて主がモーセを通してこういう約束をしてくださっていました。「きょう、主は、こう明言された。あなたに約束したとおり、あなたは主の宝の民であり、あなたが主のすべての命令を守るなら、主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。そして、約束のとおり、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。(申命 26:18-19)」国々の上にイスラエルが高く上げられて、賛美と名声と栄光が与えられるのは、主が彼らを聖なる民としたことの約束なのです。そして、今、それが実現しつつあるのです。

10:2 彼女は、非常に大ぜいの有力者たちを率い、らくだにバルサム油と、非常に多くの金および宝石を載せて、エルサレムにやって来た。彼女はソロモンのところに来ると、心にあったすべてのことを彼に質問した。

シェバの女王は、おそらく世界貿易の取決めをイスラエルと行いたかったものだと思います。大ぜいの有力者を率いているところに、それが表れています。けれども彼女の関心は、今話しましたように、霊的な事柄にありました。ソロモンに難問をもって試しました。

10:3 ソロモンは、彼女のすべての質問を説き明かした。王がわからなくて、彼女に説き明かせなかったことは何一つなかった。10:4 シェバの女王は、ソロモンのすべての知恵と、彼が建てた宮殿と、10:5 その食卓の料理、列席の家来たち従者たちが仕えている態度とその服装、彼の献酌官たち、および、彼が主の宮でささげた全焼のいけにえを見て、息も止まるばかりであった。

女王は息も止まるばかりでした。ここで大事なものは、順番です。ソロモンに知恵が与えられていることを知り、それから宮殿や食卓、いけにえと続きます。主がソロモンに与えられたのは、一義的に知恵であり、それに付け加えてあなたの願わなかった富も与えると約束されました。ですから、女王のしているのは、単なる世の富ではなく、主ご自身の証しだったのです。したがって、次の賞賛になるのです。

10:6 彼女は王に言った。「私が国であなたの事績とあなたの知恵とについて聞き及んでおりましたことはほんとうでした。10:7 実は、私は、自分で来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じなかったのですが、驚いたことに、私にはその半分も知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄は、私が聞いていたうわさよりはるかにまさっています。10:8 なんとしあわせなことでしょう。あなたにつく人たちは。なんとしあわせなことでしょう。いつもあなたの前に立って、あなたの知恵を聞くことのできる家来たちは。10:9 あなたを喜ばれ、イスラエルの王座にあなたを着かせられたあなたの神、主はほむべきかな。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義とを行なわせられるのです。」

午前礼拝で学びましたように、彼女は、ソロモンの栄華を見て、その輝きを見て、彼をほめたたえたのではなく、主なる神の名をほめたたえました。彼女の語っていることは、実に正しいです。イスラエルの王座に着いたのは、ソロモンの素性や能力ではなく、もっぱら主ご自身です。主がソロモンを喜ばれたのです。覚えていますか、列王記はアドニヤというダビデの子が王権を取ろうとしたところから始まりました。ヨアブやエブアタルなど、家来までがそこになびきました。ソロモンは、王になるにはふさわしくなかったのです。けれども、主がソロモンを選ばれていたのです。

そして、ソロモンを主が喜ばれたのは、彼が優れているからではなく、主が「イスラエルをとこしえに愛しておられる」からです。ダビデがバテ・シェバからこの子を得た時に、ナタンは彼にエディデヤと名づけさせました。エディデヤは「主に愛された者」という意味です(2サムエル 12:24-25)。ダビデがウリヤを殺すという大きな罪を犯した後で、初めの子はすぐに死に、その後バテ・シェバから生まれた子です。

そして最後に、ソロモンをして主が、公正と正義を行なわせしめているとシェバの女王は言っています。箴言には、「正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。(14:34)」とあります。ソロモンが正義と公正に基づく裁きを行なっているので、このようにイスラエルが高められているのだ、と言っています。他の何物によっても、国は高められることはありません。もう一つ、「王は正義によって国を建てる。しかし重税を取り立てる者は国を滅ぼす。(29:4)」と箴言にあります。彼は晩年にこの重税を行なってしまいました。

10:10 彼女は百二十タラントの金と、非常にたくさんのバルサム油と宝石とを王に贈った。シェバの女王がソロモン王に贈ったほどに多くのバルサム油は、二度とはいって来なかった。10:11 オフィルから金を積んで来たヒラムの船団も、非常に多くのびやくだんの木材と宝石とをオフィルから運んで来た。10:12 王はこのびやくだんの木材で、主の宮と王宮の柱を造り、歌うたいたちのために、立琴と十弦の琴を作った。今日まで、このようなびやくだんの木材がはいって来たこともなく、だれもこのようなものを見たこともなかった。10:13 ソロモン王は、その豊かさに相応したものをシェバの女王に与えたが、それ以外にも、彼女が求めた物は何でもその望みのままに与えた。彼女は、家来たちを連れて、自分の国へ戻って行った。

ソロモンとシェバの女王の間で、贈り物が交換されています。興味深いですね、聖書は西洋の書物だと考えたら大間違いで、むしろお返しをする東洋に近い文化を背景にしています。そして、ヒラムの船団がオフィルから白檀の木材と宝石を持って来たことも書いています。ここで著者が繰り返しているのは、「今日まで、このようなものは入ってこなかった」ということです。つまり、イスラエルの国が栄えに栄えて、その絶頂にあったことを示しています。

2B 富と力の惑わし 14-29

しかし、このような時が最も霊的には危険なのです。シェバの女王も、またヒラムも、これは主がなさっていることだと、主がその源であることを告白しています。したがって、ソロモンはその栄光を自分の懐の中に入れてはいけません。けれども、彼は入れはじめました。富と栄光を貪るようになりました。それが分かるのが、14 節から 29 節までの記述、そして明らかになるのが 11 章の始まりです。

10:14 一年間にソロモンのところにはいって来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。10:15 このほかに、交易商人から得たもの、貿易商人の商いで得たもの、アラビヤのすべての王たち、およびその地の総督たちからのものがあつた。

22トン 6440 キロの金が入ってきました。これを 1 グラム 5000 円だとしたら 1132 億 2 千万円になります。恐ろしい量です。そしてもっと恐ろしいのは、数字の示唆していることです。「六百六十六」は聖書の他の箇所はどこで見られるでしょうか？「また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。ここに知

恵がある。思慮ある者はその獣の数字を教えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。(黙示 13:17-18)」反キリストの名の数字が、六百六十六なのです。

「六」という数字が聖書の出てくるところに、それは「人間」を表していることが多いです。神の数字である「七」に一つ足りない「六」であります。例えば、イスラエルに立ち向かったペリシテ人の勇士ゴリヤテは、その背が六キュビト半、槍の穂先が六百シェケルとあります(1サムエル 17:4,7)。人間と言っても、神なしの人間を表しています。私こそが全てのことを成し遂げることができる、という高慢の数字です。ですから、反キリストの体制は、ソロモンの後期の治世に似ているかもしれません。つまり、神の栄光の輝きに近いのです。神のように輝いているのです。平和にしろ、繁栄にしろ、まるで神が与えたかのような輝きを持っているのです。そして人々は反キリストをほめたたえ、そして彼に権威と力と位を与えた悪魔をほめたたえます。「サタンでさえ光の御使いに変装するのです。(1コリント 11:14)」と使徒パウロは言いました。

10:16 ソロモン王は、延べ金で大盾二百を作り、その大盾一個に六百シェケルの金を使った。
10:17 また、延べ金で盾三百を作り、その盾一個に三ミナの金を使った。王はそれらを、レバノンの森の宮殿に置いた。

ソロモンが建てたレバノンの森の宮殿には、このように武器を貯蔵していました。それは金で造られていたので、実際の戦闘で使うというよりも武力を象徴しているものでした。力による栄華を表していたのです。

10:18 王は大きな象牙の王座を作り、これに純粋な金をかぶせた。10:19 その王座には六つの段があり、王座の背には子牛の頭があり、座席の両側にひじかけがあり、そのひじかけのわきには二頭の雄獅子が立っていた。10:20 また、十二頭の雄獅子が、六つの段の両側に立っていた。このような物は、どこの王国でも作られたためしかなかった。

王座も金、そして王権を示す雄獅子を形取った椅子と階段があります。

10:21 ソロモン王が飲み物に用いる器はみな金であった。レバノンの森の宮殿にあった器物もすべて純金であって、銀の物はなかった。銀はソロモンの時代には、価値あるものとはみなされていなかった。10:22 王は海に、ヒラムの船団のほか、タルシシュの船団を持っており、三年に一度、タルシシュの船団が金、銀、象牙、さる、くじゃくを運んで来たからである。

ヒラム船団は、紅海をまたいでいましたが、タルシシュは地中海をまたぐ船団です。タルシシュは今のスペイン北部にあったのではないかとされています。したがって、南の海にも北の海にも世界的な貿易を展開させていました。そのため、金も入荷できて、どこもかしこも金だったのです。

金による装飾は、天のエルサレムもそうであります。そこはガラスのように純粋な金が都に用いられています。真珠が城壁の門に、土台石は宝石です。したがって、神の輝きとは貴金属にあるような輝きであり、すべての富、栄光、力は神とキリストのものであることを表しています。けれども、いま申し上げましたように、神のようであって、そうではない人間の栄光なのです。では、何が違うのか？キリスト者に対して、神はこう約束されました。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(2コリント 3:18)」主の似姿に変えられていきます。けれども、サタンは「いと高き方のようになろう。(イザヤ 14:14)」として墮落し、天から追放されました。

御霊によって主の似姿に近づくことと、神のようになろうという欲望の違いは、「従順」あるいは「服従」です。キリストは天と地にあるすべての権威が父から与えられました？なぜか？この方は、ご自分で判断せず、父が判断されることを判断し、ご自分では語らず父が語られることを語り、ご自分では何一つ行なわれなかったからです。それに対して、悪魔は自分の意志で、神から独立して、神のようになろうとしたのです。これを高慢と言います。私たちが、キリストの命令に服従する、子の方の前にへりくだって、それでキリストが我が内におられて生きてくださっているのか、それとも、ただ真似だけをしようとし、その栄光と地位と位を欲しているのかの、違いであります。

10:23 ソロモン王は、富と知恵とにおいて、地上のどの王よりもまさっていた。10:24 全世界の者は、神が彼の心に授けられた知恵を聞こうとして、ソロモンに謁見を求めた。10:25 彼らはおのこの贈り物として、銀の器、金の器、衣服、武器、バルサム油、馬、騾馬などを、毎年きまって携えて来た。

主は確かに、王に富を与えられました。主がエルサレムに対して持つておられる御心は、イザヤ書 60 章で読むとおりです。主が留まるエルサレムに国々が贈り物を携えてきます。けれども、ソロモンは先に読んだように、その富に加えてさらに多くの富を集めたのです。これは、主がモーセによって語られた、イスラエルの王に対する戒めに違反するものでした。「**自分のために金銀を非常に多くふやしてはならない。(申命 17:17)**」彼は、これまである富を主のものであるということを忘れて、貪り、自分の魂をこれらのことに打ちこんでしまい、それで伝道者の書にありますが、彼の心はカラカラに乾ききってしまいました。

10:26 ソロモンは戦車と騎兵を集めたが、戦車一千四百台、騎兵一万二千人が彼のもとに集まった。そこで、彼はこれらを戦車の町々に配置し、また、エルサレムの王のもとにも置いた。10:27 王は銀をエルサレムで石のように用い、杉の木を低地のいちじく桑の木のように大量に用いた。10:28 ソロモンの所有していた馬は、エジプトとケベの輸出品であった。それは王の御用達が代価を払って、ケベから手に入れたものであった。10:29 エジプトから買い上げられ、輸入された戦車は銀六百、馬は銀百五十であった。同様に、ヘテ人のすべての王も、アラムの王たちも、彼らの

仲買で輸入した。

戦車と騎兵です。戦車一台に、当時、三頭の馬が必要でした。二頭で一台を動かし、補充に一頭いました。したがって、1400 台の戦車に対して 4200 頭の馬がいたということです。そして戦車の町々に置きました。さらに、これらの馬がエジプトからの輸入品であるとあります、そこまでご用達を行かせて手配しました。他のヘテ人の王たちやアラムの王たちも同じようにしていました。

これは何を表しているか？「世の力に頼っている」ことを表しています。これをまさに主がモーセを通して、イスラエルの王が行なってはいけないと戒めておられたことです。「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。(申命 17:16)」この戒めをまさにソロモンは背いていたのです。ですから、先ほどお話したように、ソロモンの栄華が神の栄華に似ているようで人間の栄華になってしまっているのは、彼が主の命令に聞き従っていらなかった、従順でなかった、というところにあるのです。

2A 離れた心 11

そしてついにソロモンは、神の前のみならず、誰に対しても明らかな罪を犯します。

1B 千人の女 1-13

11:1 ソロモン王は、パロの娘のほかにも多くの外国の女、すなわちモアブ人の女、アモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヘテ人の女を愛した。11:2 この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中には行ってはならない。彼らをもあなたがたの中に入れてはならない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる。」と言われたその国々の者であった。それなのに、ソロモンは彼女たちを愛して、離れなかった。11:3 彼には七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがあった。その妻たちが彼の心を転じた。

これも、モーセを通して主がイスラエルの王に厳に戒めていた内容です。「多くの妻を持つてはならない。心をそらせてはならない。(申命 17:17)」ソロモンは、馬という軍事力、金という富の力、そしてついに女という領域で、すべて失敗しました。金銀、馬という富や力に対する欲望と同じように、女への欲望も留まるところを知りません。ある注釈書にはこう書いてありました。「もしひとりの妻に満足できないのであれば、ソロモンのように千人の女がいても満足しないであろう。」多くの妻を彼は持ちました。

それだけでなく、外国人の女たちと結ばれていることが深刻です。神を敬っている女であれば神を第一にして生きられますが、そうでなければその女の神々を拝むようになります。言い換えれば、自分がその女を神に導くのではなく、女が女自身の価値観に男を導くようになるからです。ですから、信者と不信者の結婚は釣り合いません(2コリント 6:14-15)。

そして大事な部分は 2 節の終わり、「ソロモンは彼女たちを愛して、離れなかった。」です。単に愛したのではなく、愛して離れませんでした。結びついてしまいました。使徒パウロは、コリントの教会にある不道徳をこのように責めました。「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりの者は一心同体となる。」と言われているからです。しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。(1コリント 6:16-17)」心と体は異なるのだ、と世間は言います。だから結婚する前にいろいろ試してよいのだ、となります。いいえ、一度結ばれたら、心もすべて離れないのです。霊と魂と体は密接に結びついています。

そして、パウロは「しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」と付け加えました。男女の関係というのは、実は神と信仰者との交わりに深く関わる部分です。とても似ているのです。主は、イスラエルのことをご自分の妻にたとえ、教会をキリストの花嫁にたとえました。そこは霊的に愛と親密さの、繊細な営みがあるのです。だから、特に自分が誰と交わるのかを細心の注意を払って見分けなければいけません。ゆえに、主は誰と交わるかに注意しなさいと命じました。

11:4 ソロモンが年をとったとき、その妻たちが彼の心をほかの神々のほうへ向けたので、彼の心は、父ダビデの心とは違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった。11:5 ソロモンはシドン人の神アシュタロテと、アモン人のあの忌むべきミルコムに従った。11:6 こうしてソロモンは、主の目の前に悪を行ない、父ダビデのように、主に従い通さなかった。11:7 当時、ソロモンは、モアブの、忌むべきケモシュと、アモン人の、忌むべきモレクのために、エルサレムの東にある山の上に高き所を築いた。11:8 彼は外国人の自分のすべての妻のためにも、同じようなことをしたので、彼女たちは自分たちの神々に香をたき、いけにえをささげた。

大事なのは、3 節にあった「心が転じた」という言葉です。そしてここでは、「彼の心は、父ダビデの心とは違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった。」というところです。ソロモンは主を愛しなかった、ということではないのです。主を愛していたのです。けれども、女たちをも愛していました。女を愛していたので、女の神々にもいけにえを捧げていました。これを「二心」と聖書では言っています(ヤコブ 4:8)。それがここでは、「主と全く一つにはなっていなかった」と書いてあるところです。

ダビデの心は主と全く一つになっていました。「あれだけ多くの失敗をしたではないですか？」という疑問を持たれる方は、ダビデが罪や過ちを犯した後どのように振舞ったかを、もう一度読み直してください。彼は自分の罪を悔いています。そして悔い改めています。ソロモンの最後とダビデの最後は対照的です。ダビデはバテ・シェバとの間で罪を犯しました。けれども彼は年を取ってから、アビシャクという若い女が彼に仕えていました。彼女は、王の体を温めるために医术を知っている部下たちがあてがったものです。もちろん、そこには性的な関わりも出てきます。けれども、「王は彼女を知ろうとはしなかった。(1:4)」とあります。ダビデは、自分の犯した罪について、その罪の重さについて嘆き悲しみ、主からの懲らしめも甘んじて受け、それゆえ罪から離れて生きまし

た。けれどもソロモンは違いました。次の箇所を読むと、主は二度、彼にこの警告をしています。けれども、彼は離れなかったのです。

だから「全き心」なのです。それは、失敗をしない完璧ということではありません。どんなことがあっても、主の前に自分をさらけ出す交わりと勇気を持っている人のことを言います。

そしてもう一つ大事な言葉は、6 節の「従い通さなかった」という言葉です。ソロモンは主に従ってきたのです。けれども従い通さなかったのです。初めに走っても、賞を得るため最後まで走り抜かなければ意味がありません。終わりの時に自分が主の前に責められることなく立つことができるのかどうか、このことを思いながら今を生きているのでしょうか？もしやましいことがあるのなら、悔い改めればよいのです。主に見える時に、今、行なっていることをして良いのかどうかを見極めればよいのです。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。(2コリント 5:10)」

そしてソロモンが行なったことですが、「エルサレムの東にある山の上に高き所を築いた。」とあります。これは、オリーブ山の南に隣接する小さな山であると考えられています。今、そこは「つまずきの山」と呼ばれています。そして神々ですが、アシュタロテはカナン人の女神で性愛の神です。そして、「アモン人のあの忌むべきミルコム」とありますが、次に出てくる「モレク」と同じです。そしてモアブ人の「ケモシュ」もありますが、こちらも「忌むべき」と書いてあります。この二つは快樂の神であり、乳児を神々にいけにえとして捧げる儀式がありました。このような恐ろしい、忌まわしいことを、女たちに行なわせていただけでなく、自分も関わり始めたのです。

11:9 主はソロモンに怒りを発せられた。それは彼の心がイスラエルの神、主から移り変わったからである。主は二度も彼に現われ、11:10 このことについて、ほかの神々に従って行ってはならないと命じておられたのに、彼は主の命令を守らなかったからである。

主は忍耐のある方です。ソロモンの背信に対して二度、戒めを与えられました。

11:11 それゆえ、主はソロモンに仰せられた。「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約とおきてとを守らなかったで、わたしは王国をあなたから必ず引き裂いて、あなたの家来に与える。11:12 しかし、あなたの父ダビデに免じて、あなたの存命中は、そうしないが、あなたの子の手からそれを引き裂こう。11:13 ただし、王国全部を引き裂くのではなく、わたしのしもべダビデと、わたしが選んだエルサレムのために、一つの部族だけをあなたの子に与えよう。」

ダビデに対する神の約束、つまり世継ぎの子において永遠の御国を建てられるという約束は、その一代目の子ソロモンをしてもろくも無効になりました。王国は引き裂かれます。しかし、それはダビデに対する約束自体が無効になったということではありません。詩篇 89 篇 30 節以降に、興

味深い神の約束があります。「もし、その子孫がわたしのおしえを捨て、わたしの定めのうちを歩かないならば、また、もし彼らがわたしのおきてを破り、わたしの命令を守らないならば、わたしは杖をもって、彼らのそむきの罪を、むちをもって、彼らの咎を罰しよう。しかし、わたしは恵みを彼からもぎ取らず、わたしの真実を偽らない。わたしは、わたしの契約を破らない。くちびるから出たことを、わたしは変えない。(詩篇 89:30-34)」ソロモンから始まり、歴代の王の多くが神の命令を聞きませんでした。けれども、主はとこしえに、太陽のようにダビデへの恵みはもぎ取らないと仰られているのです。これは、キリストにあって実現します。マリヤに対してガブリエルが、この子にあってダビデの王座が永遠に確立することを宣言しました(ルカ 1:32-33)。

そして、主は「父ダビデに免じて」、一つは、ソロモンの存命中は王国分裂を見せることはしない、そしてもう一つは、エルサレムのために一つの部族を与えられる、と言われました。ソロモンではなくダビデに免じて、であります。私たちも同じです。私たちではなく、キリストに免じて神の国の相続が与えられます。

2B 切り裂かれる王国 14-40

そして 14 節から、主がこの裁きを始められる様子を書き記しています。

1C 南の反逆者 14-22

11:14 こうして、主は、ソロモンに敵対する者としてエドム人のハダデを起こされた。彼はエドムの王の子孫であった。11:15 ダビデがかつてエドムにいたころ、將軍ヨアブが戦士者を葬りに上って来て、エドムの男子をみな打ち殺したことがあった。11:16 ヨアブは全イスラエルとともに六か月の間、そこにとどまり、エドムの男子をみな断ち滅ぼした。11:17 しかしそのとき、ハダデは、彼の父のしもべの数人のエドム人と逃げ去ってエジプトへ行った。当時、ハダデは少年であった。11:18 彼らはミデヤンを出立し、パランに行き、パランから幾人かの従者を従えてエジプトへ行き、エジプトの王パロのところに行った。するとパロは彼に家を与え、食料をあてがい、さらに、土地をも与えた。11:19 ハダデはパロにことのほか愛された。パロは自分の妻の妹、すなわち王妃タフペネスの妹を彼に妻として与えた。11:20 タフペネスの妹は彼に男の子ゲヌバテを産んだ。タフペネスはその子をパロの宮殿で育てた。ゲヌバテはパロの宮殿でパロの子どもたちといっしょにいた。11:21 さてハダデは、ダビデが彼の先祖たちとともに眠ったこと、また、將軍ヨアブも死んだことを、エジプトで聞いた。ハダデがパロに、「私を国へ帰らせてください。」と言うと、11:22 パロは彼に言った。「あなたは、私に何か不満があるのか。自分の国へ帰ることを求めるとは。」すると、答えた。「違います。ただ、とにかく、私を帰らせてください。」

列王記の著者は、初めにイスラエルの南からの反逆者、次にイスラエルの北からの反逆者、そして最後にイスラエル南部からの反逆者を書き記します。いま読んだところは、南からの反逆者です。ここを読むと、私はアメリカのことを思います。2001 年の同時多発テロです。なぜ、敵の攻撃を受けたのか？ひとえに、ソロモンと同じ罪を犯していたからだと思います。アメリカも同じように

世界に力を持っています。けれども、その力によって世界が安定しているのは、専らこの国が神を第一にしている時だけであります。それしかこの国の良さはないからです。けれども、その霊的遺産を彼ら自身が捨ててしまった。そこで、神は守りの垣根を取り払われてしまったのです。

イスラエルに話を戻しますと、かつて、ダビデ、具体的にはヨアブがエドム人を虐殺したことがありました。それに対する憎しみをハダデがずっと抱いていました。エジプトの王に寵愛されたにも関わらず、彼はエドムに戻りました。将軍ヨアブが死んだ時に戻ってきたのですから、ソロモンの治世の間、ずっと彼はエドムにいました。彼は、ヤコブが長子の権利をエサウから奪ったことも覚えていたことでしょう。これで憎しみをずっと募らせていて、ユダがバビロンによって滅ぼされる時にエドム人がユダヤ人にひどい仕打ちをすることがオバデヤ書の中に書かれています。

2C 北の反逆者 23-25

11:23 神はまた、ソロモンに敵対する者として、エリヤダの子レゾンを起こされた。彼は、自分の主人、ツォバの王ハダデエゼルのもとから逃亡した者であった。11:24 ダビデがハダデエゼルの兵士たちを殺害した後、彼は、人々を自分のところに集め、略奪隊の隊長となった。彼らはダマスコに行って、そこに住みつき、ダマスコを支配した。11:25 彼は、ソロモンの生きている間、ハダデの悪を行なって、イスラエルに敵対し、イスラエルを憎んだ。こうして彼は、アラムを支配していた。

かつてダビデが、ユーフラテス流域の王ハダデエゼルと戦ったことがあったのを思い出してください(2サムエル 8 章)。ダビデはようやくのこと彼らを平定しましたが、そこから逃れてダマスコを拠点とした略奪隊がいました。レゾンという名ですが、アラムあるいはシリアの始まりです。歴代のイスラエルまたユダが、ベン・ハダデやハザエルなどに攻められて戦いを強いられる歴史をこれからの列王記の話で読んでいきます。

3C 内なる反逆者 26-40

けれども、最も深刻な反逆者は南からでも北からでもなく、内部からです。

11:26 ツェレダの出のエフライム人ネバテの子ヤロブアムはソロモンの家来であった。彼の母の名はツェルアといい、やもめであった。ところが彼も王に反逆した。11:27 彼が王に反逆するようになった事情はこうである。ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。11:28 ヤロブアムは手腕家であった。ソロモンはこの若者の働きぶりを見て、ヨセフの家のすべての役務を管理させた。

ヤロブアムという人物です。エフライム族の人です。ダビデの町の破れ口のところにミロを建てたのに用いられた役人のようです。この手腕をソロモンは認めて、ヨセフ家の全ての役務を任せました。彼の名ヤロブアムは、「民が偉大になるように」という意味です。彼は大衆の人気を買うような指導者であったと考えられます。

11:29 そのころ、ヤロブアムがエルサレムから出て来ると、シロ人で預言者であるアヒヤが道で彼に会った。アヒヤは新しい外套を着ていた。そして彼らふたりだけが野原にいた。11:30 アヒヤは着ていた新しい外套をつかみ、それを十二切れに引き裂き、11:31 ヤロブアムに言った。「十切れを取りなさい。イスラエルの神、主は、こう仰せられます。『見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。11:32 しかし、彼には一つの部族だけが残る。それは、わたしのしもべダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ町、エルサレムに免じてのことである。11:33 というのは、彼がわたしを捨て、シドン人の神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アモン人の神ミルコムを拝み、彼の父ダビデのようには、彼は、わたしの見る目にかなうことを行わず、わたしのおきてと定めを守らず、わたしの道を歩まなかったからである。11:34 しかし、わたしは、彼の手から、王国全部は取り上げない。わたしが選び、わたしの命令とおきてとを守ったわたしのしもべダビデに免じて、ソロモンが活着ている間は、彼を君主としておこう。11:35 しかし、わたしは彼の子の手から王位を取り上げ、十部族をあなたに与える。11:36 彼の子には一つの部族を与える。それはわたしの名を置くために選んだ町、エルサレムで、わたしのしもべダビデがわたしの前にいつも一つのとしびを保つためである。

エルサレムにおける業務を終えたヤロブアムに対して、シロという、かつて神の幕屋が置かれていた町の出身の預言者アヒヤが彼のところにやって来ます。その内容は、先に私たちが読んだとおりです。不思議なのは、ソロモンの子には一つの部族を与えるけれども、ヤロブアムには十の部族を与えると言っているところです。十二部族なのに、一つ足りないということになります。二つの解釈があります。歴代誌第二 11 章 12 節を見ますと、ソロモンの子レハブアムにユダとベニヤミンが付いた、とあります。ベニヤミンも一組とされて一部族と数えられているということです。もう一つの解釈は、ユダ部族はソロモンの部族であり、それに加えてもう一部族を与えた、とする解釈です。ところで、シメオン族はユダの相続地に町々が与えられていましたが、どこかの地点で北イスラエルに移っています(2歴代 15:9,34:6)。

11:37 わたしがあなたを召したなら、あなたは自分の望むとおりに王となり、イスラエルを治める王とならなければならない。11:38 もし、わたしが命じるすべてのことにあなたが聞き従い、わたしの道に歩み、わたしのしもべダビデが行なったように、わたしのおきてと命令とを守って、わたしの見る目にかなうことを行なうなら、わたしはあなたとともにおり、わたしがダビデのために建てたように、長く続く家をあなたのために建て、イスラエルをあなたに与えよう。11:39 このために、わたしはダビデの子孫を苦しめる。しかし、それを永久に続けはしない。』」

主はソロモンへの裁きとしてヤロブアムを用いられるのですが、その裁きの器も主の掟に歩むならばその国を祝福するという、とても広い心を持っておられます。そしてダビデの子孫に対する苦しみについては、「永久に続けはしない」と約束しておられます。永久にこの状態が続くのではなく、終わりの日にはエフライムもユダも一つにするという約束を神は与えておられます。

11:40 ソロモンはヤロブアムを殺そうとしたが、ヤロブアムは立ち去り、エジプトにのがれ、エジプトの王シシャクのもとに行き、ソロモンが死ぬまでエジプトにいた。

ソロモンの晩年は、この反逆者ヤロブアムによってかなりの痛手をくらったでしょう。彼が何らかの形で反逆の動きを見せたのか分かりませんが、エドム人ハダデと同じようにエジプトのところに逃れます。そしてこのエジプトの王シシャクは、ソロモンの子レハブアムの時にユダに攻め入っていきます。

3B 短い一生 41-43

11:41 ソロモンのその他の業績、彼の行なったすべての事、および彼の知恵、それはソロモンの業績の書にしるされているではないか。11:42 ソロモンがエルサレムで全イスラエルの王であった期間は四十年であった。11:43 ソロモンは彼の先祖たちとともに眠り、彼の父ダビデの町に葬られた。彼の子レハブアムが代わって王となった。

これでソロモンの治世が終わります。これからの歴代の王は、同じような言い回しで終わります。彼が統治していたのは四十年であったとありますが、彼が統治を始めたのは約二十歳ではないかと言われています。したがって死んだのは六十歳ぐらいということになり、比較的短い一生でした。これは、主の条件付き約束の結果です。ソロモンが王になって主に祈った時に、主はこう言われました。「また、あなたの父ダビデが歩んだように、あなたもわたしのおきてと命令を守って、わたしの道を歩むなら、あなたの日を長くしよう。(3:14)」ソロモンの日は長くありませんでした。

いかがでしょうか？ 残念な生涯の終わりですね。主がここまで愛されたダビデの子であったのに、主を第一とするところから、主の与えられたものを愛する者となってしまいました。イエスが弟子に教えられたことを思い出します。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。(マタイ 6:33)」イエス様は、この教えの中でソロモンの栄華と野の百合を比べられました。どちらが美しいかとイエス様は聞かれました。私たちは、真実というものから目を離してはいけません。